

分かりやすい授業をしたいと思わない教員はいないだろう。このことを考えるときに、どちらがよい教え方なのかということが話題になる。英語教授法における文法中心と会話中心の論争などは、その典型であろう。

本校の英語の授業を参観していると、会話中心の授業と、どちらかという文法よりの授業とがある。4月に初任者であるSS先生の英語の授業を参観した。正直驚いた。本当に会話中心だった。3年生だからなのかとも考えた。

もう一人の3年生担当である中堅の先生の授業を参観した。やはり会話中心だった。今どきの英語の授業は、こんなに会話中心なのかと考えさせられた。しかも、ほとんど日本語を使わない。そういえば、長男が中学3年生のときに授業参観に行ってみたら、英語の授業だった。先生は、一言も日本語を使わなかった。すごいと思った。

1年生と2年生の英語の授業も参観した。こちらはベテランの経験豊富な先生である。どちらかといえば、文法よりなのだが、意識して会話を取り入れている様子だった。その結果、話すこと、聞くこと、読むこと、書くことのバランスがいいのではと感じた。きっとベテランの先生方は、文法中心の授業からスタートして、会話中心の授業へと移行してきたのだと思う。

生徒からすると、どちらが楽しいかといえば、会話中心なのかもしれない。だが、どちらが分かりやすいかとなると、どうなのであろう。私は参観していて、ベテランの先生の文法よりの授業の方が分かりやすいと思った。きっと、この感覚がもうだめなのだろうと思う。SS先生は、文法中心の授業を“traditional”と表現した。なるほど。私の感覚は、よく言えば古風、率直にいうと古いということか。

理科で考えてみる。例えば、一つの科学法則を学ぶにしても、実験や観察を通して具体的な事例を検討し、そこから帰納的に法則を導く筋道がある。一方、最初に法則を教え、それが個々の事例にも当てはまることを確認し、納得していく演繹的な筋道が考えられる。

理科教育では、前者が望ましいと考えられ、それを基本としてきたと思う。理科の授業がそうだった。だが、私のような文型人間は、帰納的な筋道よりも、演繹的な筋道の方が分かりやすいように思う。

仮に、両方の筋道を準備し、各自のスタイルに合わせて選択できるようにすれば、もっと多くの子どもたちが、うまく理科を学ぶことができ、結果的に理科好きになるかもしれない。あくまでも文型人間の考えではあるが。

分かりやすい授業を誰もが求めるが、その道のりは決して平坦ではない。今までやってきたことが正しい、唯一の道などとは思わないことである。「私は今までこうやってきました」が通用するわけではない。

重要な視点は、自分の授業が生徒にとって、果たして分かりやすいのかということである。分かりやすいのであれば、トラディショナルな部分もいっただろうし、会話中心や演繹的な要素もいっただろう。常に分かりやすさは追求していきたい。